

「縁起の輪」について

古 坂 紘 一

仏教の基本的理念の一つである縁起の思想が、高度の宗教哲學的思弁のテーマとして説示される以外に、例えば「縁起が良い、悪い」などという言葉にも見られるような、俗信的な形態をとつて世俗生活の場においても適用される例が、インドやチベットや中国に於いてはどのような形によつて存在したのであるうかということは、考察すべき余地のある一問題であろう。今、そのようないわば一種の聖なる觀念と、俗なる信仰の関連性の問題にアプローチする一つの手がかりとして、「縁起の輪」を素材として、その文化史的意味を探つてみたい。ここでいう「縁起の輪」とは、西藏大蔵經北京版 No. 5811: “Pratītyasamutpādanamacakra” (ten-cin hbrul-par hbyun-bahi hktor-lo shes-bya-ba, go 32b-42b) である。作者は Klu-sgrub (Nagarijuna 竜樹) となつてゐるが、ここには「縁起」空の論理が全く表明されていないので、「中論」の竜樹の作とは考え難い。本文の概要を述べると、まず、Vagis-vara へ Buddha への帰敬頌について、一種の太陰曆の枠組

が説かれる。即ち、「仲冬の月 (Tgun-zla hbrin-po) を始めとする十二ヶ月で一年であり、(中略) 十五夜で半月である。」といい、第三・四・五日と同様に第十三・十四・十五日があり、「黒分 (nag-pohi phyogs) に於けると同様に白分 (dkar-pohi phyogs) に於いてある」という。「最初に挙げられる「仲冬の月」とは、インドの Pausa (鬼宿に月が宿る) に当る月で、それは太陽曆の十二月乃至一月に当る。チベットでは年頭の月は、ホル・ダの場合、一月(寅の月)又は三月(nag-pa 角宿)であるとされるので、この点から推してもこの曆が伝統的なチベットの曆法とは異なるものであることは明白である。」次に、仲冬の月の一日には無明、二日に老死、三日に生、四日に有、乃至十二日に行が配当され、季冬 (dgun-tha-chun: Magha) の一日には行、二日に無明乃至十二日に識が配当され、同様にして各月の日々に十二支縁起の名が当てられている。そして次に十三科目の事柄をめぐつて世俗生活上の占星術的な指針が語られる。即ち、(1) 生まれの考察、(2) 仕事の考

察、(3)行方の考察、(4)盗人の考察、(5)病気の考察、(6)眼のふるえの考察、(7)耳鳴りの考察、(8)首の音の考察、(9)舌のふるえの考察、(10)空腹の考察、(11)足の痺れの考察、(12)外面的予兆の考察、(13)思考の考察に分かたれている。(1)生まれの考察には例えば、「無明の日に生まれた子は、第九日と第九月と第九年に若し死ななければ、その時安楽になつて、財と穀物をもち、多く語り、自らの人々の間に争いと病気がなく、衰えず、八十一才で行の日に死ぬであらう。」というように、一種のホロスコープが語られている。「ここにはタブー化された日と月と年が設定されていることが注目される。」次に(2)仕事の考察では、例えば、識の日に為すべきことは、兵を集めることと、敵を殺すことと、王に灌頂することと、悉地の諸の事業と、家と村の建立とである。又、沐浴を行うと怖畏が(生じ)頭を洗うと歓喜が生じ、新しい衣服を着ると賢明になる。」等という。「この段には、この作品の社会的背景を示す比較的具体的な事象が、最も多く語られている。」次に(3)行方の考察では、例えば、「名色の日に東方に行くならば、大吉祥と会うだらう。南方に行くと思いを満たすだらう。西方に行くと求めたものを得る。北方に行くとき非常に苦惱する。」というように、四方の方位の吉凶が語られている。次に(4)盗人の考察では、例えば、「生の日に財を失えば、賊は三人である。二人は他の女、一人は自の男である。もし極めて努力

して探すなら時遠からずして得るであらう。」という。次に(5)病気の考察では、例えば、「無明の日に病気に罹ったなら、極力努力して看護すべし。もし半月のうちに死ななければ、その後五夜にして全快するだらう。」という。「このように、病氣回復時の要注意の日々が、やはりタブーとして暗示されている。」(6)眼のふるえの考察では、例えば、「無明の日に左眼がふるえると、母と父を驚惧する(ama dan pita skraggo)。行の日には良い。識の日には衣服を得る。」云々。また「無明の日に右眼がふるえると、母と父を驚惧する。行の日には所行が少しく成就される。識の日には争いが起る。」などという。「これらは身体の不随意的な変象を人倫の關係の予兆として判断するもので、俗信の典型として把えるべき記述であるが、「何々の日にそうなれば」というように、時間的な条件が加味されている点は、俗信の要素が或る意味で合理化され稀薄化されていることを示す。なお、ここに見られる「母と父」という語の順序は、インド的語法によるものである。」次に、(7)耳鳴りの考察から、(11)足の痺れの考察に至るまで、同様の俗信のことがらが語られている。(12)外面的予兆(phenomena)の考察では、例えば、「老死の日に、足から音が立つと(rkati-pa nas sgra brag na)喧騒と論争と中傷が生ずる。犬を食べると(kadyi za na)遠方から或る者が来て、所行を少し成就する。鳥が鳴くと、喧騒が生ずる。衣服を焼

くと、幾人かが鬭争して死ぬ。ねずみが衣服をかじると、少しく失う。衣服を油が汚すと、喧騒（が有り）財を得る。大地が震動すると、主人の仕事が他によつて損出される。又は敵が国を征服するであろう。」等という。「ここには、身のまわりの卑近な現象に関する俗信的事例が右と同様のパターンでくり返し提示されている。」(3)思考の考察 (bsam-pa brtags-pa) には、例えば、「もし無明の日に触れると (gal-te mar-ig-ri-mar-re) 自分が考えたことを説明せよ。……生の日には利益を識るべし。老死の日には利益を説くべし。」と詩頌の形で、為すべき思考作用が語られる。「この「触れる」ということは、何がどのように触れることを意味するのか未詳である。」以上のようにして十三科目の考察が終り、この後には「無明に触れるとき、悉地の利益を説明せよ。」というように、これも詩頌の形で十二支分の各々に関する当為などが述べられている。「ここでは「何々に触れると何々を説明せよ」というパターンが無明と行と有の所に現われる。」そして最後に、「無明等を印をもつてしるし (mshan-mas mshan) 十二支分の輪を描き、……これらの文字の輪をば識者が正しく書くべし。」といい、更に「正しく医方 (sman) と工巧 (bzo) に精通して精進すべし」といつて本文を結んでいる。

さて、以上のような本文中に登場する具体的な文化事象を表わす名辞を分類すると、特に王制と官吏の要素がここに顕

著であり、また呪術宗教的な色彩の濃厚であることが指摘できる。即ち、王制的要素を表わすものとして、次のような概念が挙げられる。——王の大臣、王の用事、王の懲罰、王の灌頂、王が能力をもつ、兵の召集、弓を執ることと矢を射ること、軍勢、敵が蜂起する、敵を殺す、敵が国を征服する、敵を思う。などは王制または武士階級に直結することがらである。更に為すべきこととして、掠奪、断命、富者の財を奪うべきこと、などが説かれているが、これは王と盗賊との間に本質的な区別がなかつたインド的通念⁽³⁾に基づく当為観念を表わす者と思われる。また次に官吏の要素を表わすことばとして、——記録、命令の達成、町の建立、家と村と町の建立、商人と召使と財と小麦粉とを川を越えて渡すこと、財と穀物と物資の集積すべきものを滞りなく迅速に（処置）すること、使者、町の長などが挙げられる。呪術宗教的事象に関する概念としては、供犠、沐浴、王灌頂、悉地の諸作業、グル (bla-ma) 或はアーチャールヤ (slop-dpon) のもとに住すること、諸の釈迦の前で法衣を着ること、ティールタハ (gmu-stegs)、家の神、田地と家を起工すること (shin-sa dan khim brtshams-pa)、医方と工巧に精通すること、工巧処の儀軌を知ること、梵行、奉納 (dib-gso) 等が挙げられよう。以上のように、特に王族とそれをめぐる官吏、僧侶、商人等がここに登場する人々の代表的な社会層である。而してこれが種蒔き

や収穫等、農事暦に特有の要素を欠如していることは、この暦の非農村的な性格を暗示している。

これの成立事情、特に年代については全く未詳であるが、母父という用語法や、ティールタハ (mu-steg) という名辞などのほか、王と盜賊の親近性など、特にインド的要素を示す概念が散見され、また作者が Nagārjuna となつてゐるのに対し、チベット固有の要素は顕著でないので、おそらくこれはインド又は少くともインドの生活文化の直接的影響が強くあつた地方で成立し、チベットにもたらされたものであるう。

しかしこの暦には、閏の数え方が省略されているので、これ自体は、運勢暦の手引書として用いられたにせよ、いわゆる暦法として実用化したとは考えられない。ともかく、十二縁起⁶というステレオタイプの聖なる觀念体系と、現世の安樂を望む世俗生活の指針又は規範とが、相互にかかわり合い得る一つの場として、「俗信的な暦」というものが機能していたことを、この縁起の輪は物語つてゐる。第一義的には深遠な縁起の思想が、最も現世順応的な社会層の間では、このような俗信そのものの形態に変容されて受容せしめられたというところに、この素材の文化史的な意味を認め得ると思ふ。

1 北京版にあつて、デルゲ版になつて。

2 「翻訳名義大集」8271.

3 山口瑞鳳氏「チベットの暦学」(鈴木学術財団研究年報10, p. 79)

4 「縁起の輪」が絵や文字で描出されたことを示す。この作品が工巧明部に属する所以でもあらう。生死輪の図との関連が予想されるが、確証はまだ得られない。

5 中村元博士『インド古代史』下、三一五頁参照。「瑜伽師地論」菩薩地の施品、戒品などにも、王と賊が共に怖畏の原因として挙げられる。(大正蔵、第三十卷五一〇、五一三頁)

6 格西曲札編『藏文辞典』によると、陽暦(?) (Hor-zla) の十二月を「無明月」(ma-rig zla-ba) とし、一月を「行月」(rdu-byed zla-ba) 云々とする十二支縁起をもとにした暦が、チベットに於いて存在したことが、これ以外にも知られる。